

タマシギ 英: Greater Painted Snipe 学: *Rostratula benghalensis*

1. 分類と形態

分類: チドリ目タマシギ科

広域分布種だが亜種はない。かつてはオーストラリアに分布する *R. australis* が本種の亜種として扱われていたが、最近では独立種とされることが多い。

全長:	225-250mm	翼開長:	430-460mm
自然翼長:	♂ 115-128mm	♀ 123-134mm	
最大翼長:	♂ 131-141mm	♀ 138-149mm	
尾長:	♂ 39-45mm	♀ 40-48mm	
ふしよ長:	♂ 38.7-42.5mm	♀ 40.8-45.1mm	
露出嘴峰長:	♂ 42.9-46.2mm	♀ 39.3-49.6mm	
全頭長:	♂ 72.8-77.5mm	♀ 69.9-80.3mm	
体重:	♂ 131-155g	♀ 151-242g	

*千葉県・茨城県における標識調査で捕獲した雄成鳥16個体、雌成鳥15個体の測定値(第一回夏羽と推定される個体を含む)。全長と翼開長のみ雌雄計5個体の計測値。

形態と羽色と換羽:

ずんぐりした中型のシギ(写真1)。頸と尾が短い寸詰まりの体形だが、脚は比較的長くて頑丈。シギ科の鳥類と同様に嘴先端は開くことができ、土中の餌をつまみ取ることができる。

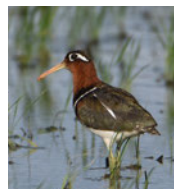


写真1. 左:タマシギ雌成鳥(8月沖縄県)と右:タマシギ雄成鳥と幼鳥(左2羽)(8月関東地方)。

幼綿羽を除く全ての羽衣の翼羽と尾羽にバフ色の水玉模様があり、眼の周囲に特徴的な白い勾玉模様がある。顕著な性的二型および年齢差をもち、雌成鳥は頭部から胸にかけて暗赤褐色で、肩羽から雨覆は濃緑色。雄成鳥および幼鳥は互いに似るが、幼羽では胸の暗色帯が不明瞭で、雨覆や尾羽の水玉斑のバフ色味に乏しい傾向がある(写真2)。また、独立直後の幼鳥は嘴が灰色みを帯びることから、赤みを帯びる成鳥と見分けられる。幼綿羽は灰褐色の地色に黒色と赤褐色の縦縞模様のある迷彩色となっている。

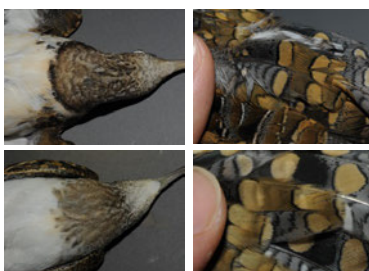


写真2. 成鳥(上)と幼鳥(下)。胸の体羽と大雨覆の羽色の違い。成鳥では胸の黒色帯が明瞭だが、幼羽の幼鳥では不明瞭。雨覆は成鳥のほうが金色が濃く、幅が広い傾向がある(すべて9月関東地方)。

成鳥の繁殖後の換羽時期や部位には個体差が大きく、関東地方では繁殖後の8月ごろから開始されるが、9月下旬でも初列風切の換羽をまだ始めていない個体もある。おそらく11-12月に完了または停止する個体が多い。幼羽から第一回冬羽への換羽は8月ごろから始まり、11-12月に完了または途中で停止する。

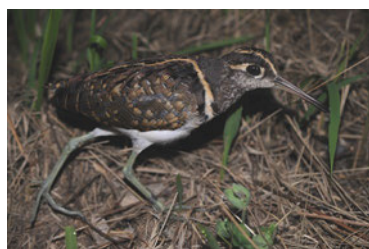


写真3. 雌幼鳥。雨覆に緑色の雌の模様が出現しているのがわかる(8月関東地方)。

雌幼鳥はこの換羽で雨覆の一部に濃緑色の羽毛が生えてくるため、雄と識別できるようになる(写真3)。また、この換羽で大部分の体羽を換羽するため、年齢の野外識別は冬以降には多くの個体で難しくなる。また、幼鳥も冬までに内側初列風切1-5枚を換羽することがある。成鳥・幼鳥ともに春には体羽の部分換羽を行なって夏羽を獲得すると考えられるが、この換羽に関する情報は不足している。

同様の環境に生息するジシギ類は、飛翔時に脚はわずかししか突出せず、より早い羽ばたきで飛ぶ。クイナ類は脚の長い体形が似るが、眼の周囲に勾玉型の斑を持つ種はいない。

鳴き声:

繁殖期の夕方から夜間にかけて、雌が「コー、コー」というよく響く特徴的な声で鳴く。飛びながら上記の声で鳴くこともある。無風条件では最大1kmほどの距離でも聞こえることがある。この鳴き声には周波数の高さに2パターンあり、状況によって使い分けている可能性がある。近距離では、一連の鳴き出しの際に「ウツ、ウツ」という音が聞こえる。雄はあまり声を出さないが、警戒時などにかすれた「ギュー」という声を出すことがある。飛び立ち時にもほぼ鳴かない。

2. 分布と生息環境

分布:

サハラ砂漠以南のアフリカと南アジアから東アジアに広く分布。国内では東北地方南部から南西諸島で繁殖記録があるが、関東地方より北では個体数が少ない。

生息環境:

国内では主に水田やその周辺環境に生息する。繁殖場所としては特に草丈の低い湿った休耕田を好む。越冬期には農業用水路に入ることもしばしばある。

4-9月に繁殖し、関東地方における雌のディスプレイ鳴きのピークは6月であるが(Maeda 2001)、場所によっては8月にも盛んに聞かれる場合がある。9月下旬に4羽のふ化直後のヒナを連れた雄が、11月に巣と卵が見つかった例があるが(時田・桑原 2005)、ともに繁殖は失敗している。繁殖地で、または短距離の渡りを行って越冬する。

3. 生活史

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
越冬期			繁殖期					越冬期			

繁殖システム:

一妻多夫とされている。雌は主に夜間にさえずり雄に求愛する。雄とつがいになると1週間程度のつがい形成、造巣、産卵期間を経て、すべての卵を産み終えると雌は巣を離れ、次の雄とつがいになるための求愛行動に移行し、抱卵と子の世話は雄のみが行なう(Komeda 1983)。関東地方で5-9月の繁殖期に捕獲した14個体の雄成鳥のうち12個体に抱卵斑またはその痕跡が認められたが、11個体の雌成鳥にはいずれも認められなかった。

巣と卵: 休耕田などの草地に、枯草や稲の藁を敷いた浅い皿型の巣をつくる(写真4)。一腹卵数は、4卵のことが多いが5-6卵の例もある。卵サイズは長径32.0-40.1mm、短

径22.3-28mm, 重量約10.3-10.8g (清棲 1978). 卵には緑灰色の地色に暗褐色の粗い斑がある(写真4).



写真4. 巣立ち後の巣と未孵化卵。8月関東地方。

抱卵, 育雛期間, 巣立ち率:

抱卵期間は19-20日。ヒナは早成性で, 孵化後すぐに巣を離れる。上木(1986)では育雛期間は70-

90日としているが, 千葉県では孵化後すぐに標識したヒナで, 標識後25日程度で親から独立した例が2列あること, 風切羽が伸長中の段階で親が周囲にいないケースも複数あったことから, より短い期間で独立する場合が多いものと思われる。

国内での繁殖成功率に関するまとまったデータはないが, 千葉県及び茨城県で巣を発見して追跡できた7例のうち, 巣立ち前の失敗が4例(卵の捕食3例, 増水による水没1例)。巣外育雛に入った3例のうち親からの独立を確認できたのは1例のみだった。

渡り: 渡りや移動分散についてはほとんど情報がないが, 千葉県では繁殖していると考えられる個体およびその場所で生まれた個体が12月まで同地に留まった例がある。

4. 食性と採食行動

泥や水中に嘴を差し込んで探ったり, 左右に振って採食する。雑食性で, ミズカサネ, カワニナなどの淡水性の貝類, 湿地性の昆虫(ユスリカ, 水生昆虫の幼虫, 直翅目), 甲殻類などの多様な動物質のほか, イネ科やタデ科の草本の種子を食べることもある。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 雄だけが抱卵と子の世話を行なう

本種は鳥類としては少数派の一妻多夫の繁殖様式を持つ。しかし, 抱卵期までの行動観察によれば, 雌は複数の雄と同時につがいになることはなく(Komeda 1983), 連続して1羽ずつの雄と複数回繁殖を行なうものと考えられる。米田(2015)によれば, 最大で4羽の雄と7回以上つがいになった例がある。同様な繁殖様式(連続的一妻多夫sequential polyandry)はシギ科およびチドリ科の鳥類にしばしばみられるものであり, 効率的に繁殖を行なうことができるという適応的意義があるものと推測される。

● 偏った性比?

上木(1986)は冬期の野外観察において性比をカウントし, 雄に偏った性比が本種が一妻多夫になることの一因ではないかと推測している。しかし, 関東地方の筆者の調査地では, 性別を判定できた捕獲個体50個体においては雌:雄=27:23であり, 雄に偏った性比は認められなかった。上木(1986)には冬羽の雌を雄と誤認していると思われる例が見られるので, これによって雄に偏った性比として記録された可能性がある。年齢と季節による羽衣の変化を性差と区別するために, 形態による性と年齢の識別法を確立することが, 本種の生態解明のために重要である。

● 個体数減少と休耕田との関係

本種は, 環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。Amano et al. (2010)によれば, 国内のタマシギの国土スケールでの分布域と地域スケール(茨城県の2か所)での個体数の両方で減少が確認され, その原因は効率的な灌漑システムの導入による圃場の乾燥化と, 湛水された草丈の低い休耕田の減少であると考察されている。Katayama et al. (2020)は, 地域スケールでのさらなる個体数減少に加えて, 湛水休耕田がタマシギの個体群存続にとって重要な役割を担っていることを示した(図1)。時代とともに集約化されていく農地景観の中で, タマシギなどの湿地性鳥類と共存可能な環境をどのように管理していけるかが今後の課題となっている。

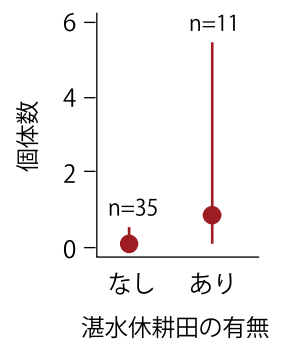


図1. 各地点の半径250m以内に含まれる湛水休耕田の有無と、タマシギの確認個体数との関係(2018年, 関東地方)。湛水休耕田が含まれる地点で確認個体数が多かった。Katayama et al. (2020)より作成。

6. 引用・参考文献

- Amano T, Mei-Hua LI & Yoshida H (2010) Silent night in Japanese rice fields? A population decline in the Greater Painted Snipe. *Ornithological Science* 9: 49-53.
- Katayama N, Odaya Y, Amano T & Yoshida H (2020) Spatial and temporal associations between fallow fields and Greater Painted Snipe density in Japanese rice paddy landscapes. *Agriculture, Ecosystems & Environment* 295: 106892.
- 清棲幸保 (1978) 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.
- Komeda S (1983) Nest attendance of parent birds in the Painted Snipe (*Rostratula bengalensis*). *Auk* 100: 48-55.
- 米田重玄. 2015. 山階鳥研ニュース 2015年7月号.
- Maeda T (2001) Seasonal variation in the calling frequency of female Painted Snipes (*Rostratula bengalensis*) in central Honshu, Japan. *J. Yamashina Inst Ornithol* 32: 91-95.
- 時田賢一・桑原和之 (2005) タマシギ *Rostratula bengalensis* の晩秋の営巣記録. 我孫子市鳥の博物館研究報告 13: 143-145.
- 上木泰男 (1986) 雪国のタマシギ. 岩崎書店, 東京.

執筆者

小田谷嘉弥 我孫子市鳥の博物館

シギ類の調査の片手間に, 同じ場所にいるタマシギをコツコツと捕まえて標識したり, 巣や父子連れを見つけたら繁殖状況を追跡したりしています。これまで情報の少なかった本種の換羽や性と年齢の識別はおおむね知見が集まったので, 論文にまとめていきたいです。今回の執筆にあたって, 共同研究者の片山直樹さんには図を提供いただきました。ありがとうございます。写真はハイイロウミツバメの死体を回収しようとしているところ。

